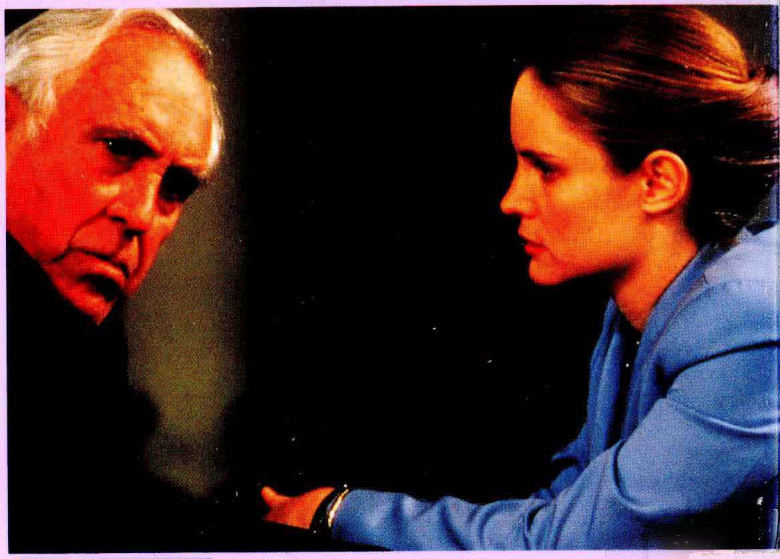
ピューリッツァー文学賞受賞作

大農場 下

A THOUSAND ACRES

ジェーン・スマイリー

橘雅子 訳



映画化原作

「シークレット —嵐の夜に—」

本年9月松竹・東急洋画系ロードショー

中公文庫

A THOUSAND ACRES
by Jane Smiley
© 1991 by Jane Smiley
Japanese translation rights arranged with
Jane Smiley c/o The Aaron M. Priest Literary Agency Inc.,
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo
Japanese paperback edition © 1998 Chuokoron-Sha, Inc.

中公文庫

大農場（下）

定価はカバーに表示してあります。

1998年8月3日印刷
1998年8月18日発行

著者　ジェーン・スマイリー

訳者　橘　雅子

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Masako Tachibana

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本
ISBN4-12-203213-X　C1197　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

大　農　場

・スマイリー
惟子訳

中央公論社

目次

Book Four 7
Book Five 115
Book Six 225
訳者あとがき 303
文庫版のための訳者あとがき 311

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

大農場

下巻

Book Four

29

母は特別美しかったとか、受け継いだ遺産や知性の点で特別だったとか言い立てることで、母を持ち上げることはしたくはない。実のところ、母はなんてもほどほどの女性だった。地域のクラブに所属し、教会に行き、ほかの女性たちと服の型紙の交換をする、ごく平凡な女性だった。家のなかをいつもきれいにし、このあたりの人と同じやり方で、わたしたちを育てた。父親の権威を尊重した母親で、特別に愛情深かったとか、子供たちの感情に特別に気を遣ったという母親ではなかった。宿題やちょっとした用事、料理や掃除の分担などをわたしたちがしたか、しなかったかに関心があっただけで、日常のわたしたちの感情は、母親がどうこうするのとは無関係な〝成長段階〟に関係があるにちがいないある種の子供時代のハロメーターに従って、上下するものだと思っている母親だった。

家は隅々まで母のものであり、母は家に責任を持っていたから、家を駄目にすることは母を駄目にすることであると、わたしたちはことあるごとに思い知らされた。キャロライ

ンが三歳ころのことだった。口紅で二階の廊下の壁に大きな丸を描いたことがあった。母は幼い子供のしたことだからと許しはしなかった。口紅をそのへんに置いておいた自分を責めることもしなかった。「ママのものに触っちゃだめ！　ここはママの壁よ、落書きしてはだめ！　キャロラインはほんとに悪い子！」と何度も何度も繰り返し言いながら、したたかに尻をぶつお仕置きをした。わたしたちの持ち物も母のもので、おもちゃを壊したり、服を破ったりすると罰を受けた。罰を受けることで、わたしたちが自制心を学ぶことを期待していたのだろうと、今はそう思う。不注意な行為は、作為的な卑劣さや柔順でないことと同様で、非難されるべき行為だったのだ。

母には隠されていた一つの歴史があった。ミネソタ州ロチェスターの高校を出た後、シーダー・フォールズの大学に一年間通ったということだ。母の納戸を見るまで、わたしたちはそのことを知らなかった。いちばん奥に楕円形の窓がある、間口の狭い奥行きの深い納戸で、柱が一本、縦に走っていて、窓の上の高いところに一つだけ棚があった。隣の部屋のクロゼットとの境の壁は、どういうわけか途中で切れ、その隙間はオーク材の余り板で埋められていた。ドアにはピンク色の靴の袋がぶら下げられ、ドアを開け閉めするたびにドアにぶつかる音がした。袋にはたくさんのポケットがついていて、それぞれに靴が片方ずつ、ヒールを外側に向けて入れられていた。わたしとローズは、その納戸に入るとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

つも数を数えた。ハイヒールが七組あった。床には、円筒形の帽子の箱が二つあり、八個から十個の帽子が入っていた。花や果物の飾りがついたものもいくつかあったが、ほとんどは顔半分をおおうヴェールがついたものだった。コサージュも五、六個入っていて、先にパールがついたピンが、サテンを巻いた茎に刺されていた。わたしたちはコサージュに陶然と見とれ、手に取って自分の胸に当ててみた。ピンで自分の指を刺したとしても、母に言うことはできないことはよくわかっていた。

ぶら下げられた服の下に立つと、ひんやりした生地の感触が伝わってきた。柔らかい生地のスカートから、埃や防虫剤やコロンやバス・パウダーのうっとりするような匂いをのせて、さわやかな風が吹いてくるような気がしたものだ。母の現在はエプロンで表現されていた（母は毎日、清潔なエプロンをしていた）が、母の過去は、タイト、ギャザー、ゴア、ペラム・ウェスト、キック・プリーツ、ダーツ入りなどさまざまな形のスカートや、当て布のポケット、肩パッド、チャイニーズ・カラーのブラウス、自分で作ったベルトとバックル、くるみボタンなどにこめられていた。まさにファッションのカタログがそこにあった。ローズやわたしはその見本を目にしているという感動だけでなく、そのファッションの名前を口にするだけでわくわくした。クロゼットの服は、当時でさえ流行遅れ――戦後の〝ニュールック〟と比べればあまりにも細身でウェストの位置が高い――だったが、

かつてあった可能性（わたしたちのではなく母の）を感じさせてくれるもので、わたしたちはすっかり魅了された。納戸に入ってドアを閉め、楕円形の窓から入ってくる日射しのなかで埃が舞っているさまを見ながら脚を組んで座っていたとき、どことなく母の可能性はまだ残っている気がした。ここにある服は、わたしたちが遊ぶことに使ってもしかられない母の持ち物だった。わたしたちは母に厄介をかけなかった。神聖な形見でも扱うようにていねいに扱った。今、わたしが母を愛そうと努めるとき、その納戸のことと母が大目に見てくれたことを思い出す。むろん、むろん、ローズのことも思い出す。ぶら下げられたスカートの下に、いつも一緒にいたローズ、わたしがていねいにスカートにコサージュをピンでとめ、バランスよく頭に帽子を載せてあげると、レディのお買い物とばかりに気どって、ぶら下げられたドレスの間に立っていたローズ。

教会の昼食会の後、ジェスは騒ぎが静まるまでの間、泊まる場所を必要としていた。ローズは父の家を使ったらとすすめた。むろん、父の寝室は使わず、別の寝室を使うということで。父の家には寝室が四つあり、結局、いつも使われていなかった。ローズがその提案をしたとき、わたしはいい機会だから家のようすを見に行き、なかを少し整頓し、父がいつ必要とするかわからないから、身の回りのものをいくつかの小さなバッグにつめこむ

ことにしようと考えた。

ある日、朝食の後、父の家に行ってみた。タイと無言の朝食を終え、タイが今日の予定と夕食には家に帰らないといういつもと違う予定を復唱するのを聞いた後だった。タイはわたしの予定をきかなかった。「わかったわ」とわたしはひどくいらだちながら答えたが、タイは無関心だった。小型トラックでタイが走り去るまで待って、わたしは父の家に続く道路に下りていった。タイはジェスが近くに来る、ある意味では、父の場所を侵すことになることを知らなかったのかもしれない。タイが知らなければ、それはそれでよかった。彼がもし何か言ったら、わたしは、もう何も起こりはしないと言っただろう。

父の家に向かっているとき、わたしは、父の家出が母のことをよく知るためのきっかけを作ってくれたような気がした。わたしの毎日の生活がかつてそこにあったということを忘れていたわけではない。わかっていたのはもちろんだ。父がいない今、もっと詳しく見ることができると思ったのだ。クロゼットや屋根裏をつぶさに調べ、物を持ち上げて、その下にあるものをのぞきこんだり、キャビネットや棚の隅をもう一度調べることができる。母の手書きのものや趣味で作った作品が少しでも残っていれば、母はそこにいるということになる。ひょっとしたら、母の匂いが残っているかもしれない。まだ見ていない引き出し、二十二年間、一度も開けられたことのない引き出し、開けられることで、ただ一度、

つかのま呼吸することになる引き出しはないだろうか。母には父のことがわかっていた。母だったら、父のことをどんなふうに言っただろうか。母だったら、どんなふうに仲裁をしただろうか。父の家で母のことが何かわかるようなものを見つけたら、ひょっとしたらそれで父のことが少しでもわかるようになるかもしれない。その期待がわたしの足を急がせた。車道に雨ざらしになっている食器棚や、これみよがしにまだ値札を付けて、裏口のポーチにひっくり返されている白いブロケード張りのソファベッドのそばを通った。父の家はローズとわたしが毎年春に大掃除をする。隅々まで知りつくしたところだから何もないかもしれないと、意気込みがそがれそうになったが、きっと何かあるにちがいないと、自分に言いきかせた。

屋根裏はすでに焼けつくように暑かった。断熱のための工夫は何もされておらず、金属製の屋根が、真夏の太陽を少しは跳ね返す役割を果たしていたとしても、ほとんど効果はなかった。一本の通路が四つの窓の一つ一つに通じていて、東側と西側の窓は、換気のために広く開け放たれていた。わたしたち家族はこの家に六十五年間も住んできた。そのわりには、置かれているものは多くなかった。ぐるぐる巻きにされたカーペット。父がどこかで買ってきたにちがいない、ほとんど新品と言っていい金色のシャギー・カーペットで、敷かれているのを見たことがない。旧式のらせん状の黒いコードと丸いベークライトの差

し込みがついたフロア・ランプが三つ。きちんと折りたたまれたマットレス。『サクセスフル・ファーミング』のバックナンバーが入った箱が三つ。七〇年代はじめころの日付のついた『ウォーレスズ・ファーマー』が入った箱が一つ。カバーのない黒い羽根の古い扇風機。ひさしの下には古ぼけた箱がいくつかあった。第二次大戦以降の古い新聞と、『デモイン・レジスター』のヨーロッパ戦線勝利の日の記念号が入っていた。この雑誌に、名前も聞いたことがない人の結婚式の招待状が挟まれていた。母にあてたものだった。わたしはその匂いを嗅いだ。新聞の匂いがした。その箱のさらに奥に、一九四五年の農場の領収書が入っていた。ほかの箱にも領収書と古い『ライフ』誌が何冊か入っていた。それだけだった。わたしはひさしの下からはい出てまんなかに戻った。埃まみれのスカートが胸にまとわりついた。二階のクロゼットはわたしの記憶どおりだった。ブーツと父の服――ほとんどがオーバーオールとカーキ色のズボン――でいっぱいだった。実際、なかに物が入っていたのはそのうち二つクロゼットだけで、ほかはほとんどハンガーだけだった。わたしは父の部屋で壁にかかっている写真を見た。曾祖父のデイヴィスがイギリスを離れる前夜に、ポートレイトとして撮った写真で、かしこまって立っていた。それは彼らが撮った最後の写真だった。クック祖父母のはメイソン・シティで撮った結婚式の写真だった。後に、クック祖父は最初に買ったトラクターのそばに立っている写真も撮っている。トラ

クターはスパイク付きで無タイヤのフォード製だ。ロチェスターの『ポスト・ブリテン』紙に載った母の婚約写真もあった。わたしは以前、その写真を何度も何度も見たものだ。今度、あらためてもう一度じっくり見てみたが、新しい発見は何もなかった。何を考えているのかわからない表情を浮かべた、希望がいっぱいの娘は、当時の娘が着ていた肌を露出させないドレスを着て、態度はあくまでも貞淑そのもの。壁には、帽子をかぶった赤ん坊の白黒写真もあったが、わたしたち三人のうちのだれでもなかった。わたしはその写真を何度も見たことがあるが、この赤ん坊はだれ、と父にきいたことはなかった。父とわたしとの間にそれだけ距離があったという証拠だ。わたしがきけば、父はおそらく覚えていないと答えただろう。父もわたしも、そのとき、若かった。父のベッドの下を見た。ソックスの片方とアスピリンのあき瓶と溜まった埃があるだけだった。

引き出しを開けてみた。かつては、母の教会用の白い手袋、ガーターベルトやガードルやストッキング、長い丈と短い丈のスリップ、ブラジャー、長いナイトガウンのほかに、銀色の飾り紐ボタンがついたピンク色の寝室用ジャケットも入っていた。母が亡くなる前に来る日も来る日もナイトガウンの上にはおっていたジャケットだ。母が亡くなってからは、中身が老人用のショーツやアンダーシャツ、バンダナ、厚手の白いソックス、厚手のウールのソックス、礼装用の黒いソックス三組に変わった。防寒用下着もあった。わたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor